



さぎし
詐騎士 7

かいとこ
Kaitoko



レジーナ文庫

Regina

登場人物
紹介

ノイリ ▶

ルゼの敬愛する
かつての
聖女候補。
現在は人妻。

ナジカ ▲

傀儡術師の子供達の
リーダー格。頭がいい。

▲ ハワーズ

聖騎士団の問題児。
女好きでお調子者。

エリネ ▲

実りの聖女となった
純朴な少女。

ティタン ▲

ギルネストの従騎士。
ルゼのことが
好きだったが……

ウイシュニア ▲

エリネ付きの侍女。
潔癖かつ利発な美少女。

▲ 魔王エスティーダ

地下帝国アルタスタを治める
魔物達の王。

ギルネスト ▲

ランネル王国の第四王子で
軍の幹部。別名「サディスト」。
ルゼと婚約したものの、
未だキスも叶わずにいる。

ルゼ ▲

身分、年齢を詐称し聖騎士と
なった少女。
人や物を操る傀儡術が得意。
思わぬ玉の輿に日々戸惑っている。

目次

書き下ろし番外編	
苦難の続き	
375	
詐欺士	7

詐^さ
騎^ぎ
士^し
7

第一話 騷乱の後始末

私の名はルゼ・デユサ・オブゼーク。

貴族第三位のデユサであるオブゼーク家の長女で、縁があつて実りの聖女エリネ様の聖騎士をしている。このランネル王国初の女騎士であり、第四王子ギルネスト殿下の婚約者で、幼い頃から魔物狩りをしていたちよつと変わったお転婆な令嬢、というのが世間に公表されている、私のやたらめったらさらさらしい出自である。

実際は、傀儡術かいらいじゆつというかなり特殊で、世間では忌み嫌われる魔術の才能を持っていたために親から捨てられた孤児である。少なくとも私はそう思つて育つたため、いきなり貴族の娘にされた時は驚いた。

そんなとんでもないことになつてしまつたきっかけは、余命宣告されるほど重い病やまいを患わづらつたオブゼーク家次男、ルーフェス様の身代わりとして男装し、騎士団に入り込んだことだ。以来実力主義の王子様に妙に気に入られてしまい、魔物と人間とで共謀して私腹を肥やす悪人共をぶつ潰す手伝いをしていた。そしてたら魔物の王族と知り合つたわ、ずつと探していた癒やしいやすの聖女ノイリと再会するわ、それらの出会いを機に王子様が魔物達との貿易を始めてしまふわ。その間に私が女であることがバレてしまい、気がつけば身代わりをしたことの辻褄つじま合わせのために、ルーフェス様の双子の妹ということにされていたのだ。こう言うのもなんだが、我ながら無茶苦茶だ。

実力主義の王子様ことギルネスト殿下、ギル様は、そんな私の無茶苦茶な経歴を承知で求婚してきた。正確にはプロポーズ予告だ。そしてついこの間、正式に求婚する条件だった、ある暗殺組織の壊滅……というか、そこにいた傀儡術師達の懐柔に成功し、私を断れない状況に追い込んだ。そのため、とうとう私は王子様の婚約者となつてしまつたのだ。

なんとという玉たまの輿こし。人生何があるか分からないものである。

そして現在、私は冷たい風にさらされ、外套がとうの襟えりをかき合わせながら、ある建物を見上げていた。

飾り気のない、実用じつよう一辺倒いっぺんどうの施設だ。長いこと人が出入りしていなかつたせいか傷いたんではいるが、造りはしっかりしている。

この建物に、先日懐柔した傀儡術師三十人強を收容することになつたのだ。私がここ

にいるのは、これまでギル様の従騎士ゼクセンの別荘にいた彼らを、ギル様達と共に引率してきたからである。

傀儡術師達や、建物の見張り役として一緒に来た同僚の聖騎士達も、初めて見るこの建物に感嘆の声を上げた。皆、ここまで立派なものだとは思っていなかったらしい。

元々ここは、傀儡術の才能のせいで親に捨てられた子供を引き取るために見つけた、新しい孤児院の候補地だったらしい。ギル様が自分の手駒を増やし、なおかつ傀儡術師である私にプレゼントするべく内緒で探してくれていたのだ。それがまさかこんな形で役に立つとは思わなかったそうだ。

ここが新しい家だと知って、傀儡術師の子供達ははしゃいでいる。子供達の多くは組織に入ってからずっと森の中にあるアジトに住み、森から出ることはなかったから、初めての場所が楽しくて仕方がないのだ。一方、大人の傀儡術師達はただただ茫然としていた。何しろ傀儡術師達と、十人以上の聖騎士という大所帯が入り口前でたむろ出来るぐらい、敷地も建物も広いのだ。

「でも意外と綺麗ですね。裏に入っているとはいえ立地もさほど悪くないし、補修もそんなに大変そうじゃないのに、どうして使われてなかったんです？」

私の問いにギル様はさらりと答える。

「ああ、祟りがどうか、悪霊がどうのという噂があるんだ」

沈黙が落ちた。子供達もピタリと動きを止め、そのうち半分ほどが怯えて大人達に抱きついた。

「い……今何と？」

「だから——言ってしまえば、幽霊が出るらしい」

子供が悲鳴を上げて泣いた。子供だけでなく、大人も似たような反応をしていた。

「僕が視察ついでに泊まった時は、何も見えなかったがな」

その言葉を聞いて、これからここに住まう傀儡術師達は胸を撫で下ろす。

「いやいや、出ましたって！ ただ、ギル様が寝ぼけて怒鳴りつけたら静かになっただけ」

ゼクセンの言葉に、傀儡術師達が再び怯えの色を見せた。

「えっと……みんな泊まったの？」

「うん、一緒に泊まったセルに結界を張ってもらったから平気だったけど。ギル様はそういうのには鈍感な性質らしくて」

私は平然としているギル様を睨みつける。

「ギル様、いくら何でもそれは……。術者ばかりとはいえ子供がいるんですよ？」

「大丈夫だ。ニースのような魔力無しには危険だが、これだけ魔力のある人間ばかりだと死霊は弱る。奴らは魔力に弱い」

「そうなんですか……って、まさかそれで自然消滅するまで我慢しろと?」

「まさか。ここはこいつらじゃなくて、普通に引き取った子供を入れる予定だったんだぞ。いくら傀儡術の才能があっても、普通の子供にそんな真似するか。もうすぐエリネ様と神官達が来て悪霊祓いをする事になっている。それに協力するんだ。これだけ魔力持ちがいれば悪霊などどうにでもなる。ここが放置されたのは、悪霊祓いには多数の魔力持ちの協力が必要なのに、それを揃えるのが難しかったからだ」

皆は首を傾げた。

「難しいんですか?」

「それだけの魔術師を悪霊の出る場所へ呼ぶのに、どれだけの伝手と手間と費用が掛かると思ってるんだ? 数を揃えるというのは本当に難しいんだぞ」

確かにものすごく難しいかもしれない。魔術師のような技術職は働き口で困ることはないから大抵忙しいし、悪霊は嫌だろうし。

「なんで悪霊が出るようになったんです?」

「大量虐殺だ。つまり曰く付きの激安物件だが、要は出なくなればいいんだろ?」

突然尋ねられたエルド——瞬間移動が得意な傀儡術師の青年が身をすくめながらも答える。

「まあ……………悪霊が、いなければ」

本当は嫌なのだろうが、彼らは嫌とは言えない立場である。

「そうだろう。ここぐらいしか、予算内で買える場所がなかったんだから我慢しろ。ただでさえエノーラに借りを作ってるんだ。お前達の救出に魔族を雇ってもらったこともあつてな」

その言葉を聞いて傀儡術師達は黙った。先日、私とエリネ様が彼らに誘拐された際、彼らの仲間によってアジトが爆破され、ここにいる大半が地下に閉じ込められたのだ。どうい経緯か知らないが、事態を知るやすぐさま動き出したゼルバ商会のエノーラお姉様は、即断即決で金に物を言わせて魔族を雇ったという。その時の費用は安くなかったらしい。黙ったエルドを見てギル様は満足そうに頷く。

「もう、ギル様は強引なんだから」

ゼクセンが呆れ半分で言う。霊に怯え、絶するようになりに彼に引つつくティタンことティタニスとレイドが情けない。ギル様の従騎士の中で、一番肝が据わっているのは意外にもゼクセンのようだ。

「ゼクセンは霊とか平気なの？」

「まあね。こういう物件はけっこうあるんだよ。うちの本邸も元々はそういう物件なんだって。安く買い叩いて、執事のグモロスさんがどうにかするんだ。彼は大概のことは一人で出来るから」

私は、先日一緒に仕事をしたマイナー魔法の蒐集家である老紳士の顔を思い浮かべる。「相変わらずあの人は万能執事ね……。っていうか、これもエノーラお姉さまの紹介？」
「そう。さすがにグモロスさん一人じゃ無理だから買わなかった物件だよ。だけど神官を引っ張ってこられるなら、ってことでギル様に紹介したんだって」

そうやってエノーラお姉様はギル様にどんだん貸しを作っていくのだ。金と人脈の力は偉大だ。それが新たな金と人脈を生むのだから。

「殿下、二階の窓からエリネ様と神殿の方々が見えました。お出迎えの用意を」
外で無駄話をしていると、建物の中からギル様が所属する火矢の会の騎士が出てきて報告した。

火矢の会とは聖女を守る非公式団体である。彼らはエリネ様や神官達の到着を待つ間、ギル様の命令で、中に危険はないか見に行ってくれたのだ。こんな場所に先に入らざれるとは可哀想に。

「いいか、除霊にはしっかりと協力するように。自分の居場所は自分で作るんだ」

ギル様は傀儡術師達に向き直り、腰に手を当てるように言い放つ。

「お前達はエリネ様の保護下にあるから、今回は神殿がタダで手を貸してくれる。本来なら高いお布施を払わなければ絶対に動いてくれないだろう。神とエリネ様とエノーラに感謝しつつ、自分の魔力で悪霊を駆逐し、自分の手で建物を補修しろ」

傀儡術師達は頷こうとして、はたと気付いた。

「え、補修も？」

「普通の建物の補修なんてしたことがないんですが」

不安げに言う傀儡術師達。彼らが住み着いていたのは遺跡だから、色々と勝手が違うのだろう。エノーラお姉様に感謝することについては何の疑問もないようだ。

「残念ながら補修のために人を雇う金はない。もちろん、聖騎士団の男どもの手は貸す。それが終わって落ち着いたら、最低限の読み書き計算が出来るようにしてやる。それでも文句がある奴は素直に言え」

言えるはずがない。私がそう思った時、十歳ぐらいの目つきの悪い少年、ナジカが手を挙げた。

「質問いいですか？」

「なんだ。言ってみろ」

「ここって元はどういう施設なんですか？」

「ただの研究所だ。さ、中に入ってエリネ様をお迎えするぞ」

ギル様は嫌そうな顔をするエルドの背中を叩きつつ、彼らを連行した。

結局、大量虐殺があったここが何の研究所だったかは言わなかった。

神官達を引き連れたエリネ様が施設の静かな広間に入ると、突然ラップ音が始まり、出迎えた子供達が悲鳴を上げた。

「え、何、何!? 何ですかこの音っ!？」

「ただの家鳴です。エリネ様、どうぞ中央へ」

驚くエリネ様の問いを巫女頭のアルシエラ様はさらりと流し、そのまま彼女を中央へ導いた。

「た、ただの……なんですか？」

「大したことはございません。エリネ様、ご自分で望まれた案件には責任を持って対処せねばなりません。もちろん私達も全力でエリネ様をお支えいたします」

「は、はい」

私こそそのかしたとはいえ、傀儡術師達を助けるというのはエリネ様も望んだことだ。だから彼女が動かなければならない。

「エリネ様は聖女であらせられるので、今後、人々に乞われて似たような現場にお出向きになることもございましょう。今回は優秀な神官達がいるのでまず安全。経験を積む良い機会です」

「え、そうなんですか……」

慰問とかお力の研究の時くらいしか一緒にしたことはなかったが、聖女の仕事にもいろいろあるようだ。不安そうにするエリネ様に、道案内のため同行してきたエノーラお姉様が声をかけた。

「ご安心ください、エリネ様。ここにはうちの愚弟も泊まったことがございます。ギルネスト殿下の一喝で静かになる悪霊など、エリネ様の清浄な気配に当たればすぐに浄化されてしまいますわ」

エノーラお姉様のおべっかに、さすがにそれはないだろうという顔をするエリネ様。しかしアルシエラ様も同調するように頷いた。

「もちろんです。エリネ様がお持ちのような強い魔力には、そういった力もございます。ギルネスト殿下の一喝で静まったのだとしたら、それは殿下の魔力が強いからでございます

ましよう」

「まあ、存じませんでした。だからわたくしのような素人でも、お役に立てるのですね」
 エリネ様は意を決したのか、怯えながらも中央へと進み出た。神官がエリネ様を中心にして床に円を描き、その円と私達の間に魔法陣が描かれた紙を敷いた。

必要なのが強い魔力であるならエリネ様でなくてもいいような気がするけど、アルシエラ様の言う通りきつと経験を積ませたいのだろう。

「エディア二ース様、こちらに。セルジアス様、グランディナ殿下、お手をそのまま」

神官医のセルと姫様に両手を握られた聖騎士、エディア二ース様こと二ース様が、複雑そうな表情を浮かべて紙の魔法陣に乗る。

「皆さんの中に魔力のない方はいらっしゃいませんか」

「本当に小さな子供と、二ース以外の魔力の少ない騎士は外に出る」

神官の呼びかけを受けてギル様が命令する。傀儡術師には魔力が少ない者はいないから全員この場に残り、聖騎士達は入団間もない頃に行った魔力の検査結果のもと、何人かが出て行くこうとする。それはいいけど、なんで魔力無しの二ース様は残るんだろうか。恐い目に遭わせるのが可哀想な幼児達は、大人達に背を押されておすおすとお前に出た。

「ラント、面倒を見ていてくれるか？」

「構わねーぞ。ほら、ガキ共行くぞ」

私のお友達であるウサギ獣族のラントちゃんに促されると、幼児達とは勝手に機嫌良く走って行った。子供達は皆、動くぬいぐるみのような彼が大好きなようだ。

彼に手を引かれて外に出ていく子供達を見て、苦笑しながら魔力の少ない聖騎士も後を追う。

「エノーラさんと、侍女のお二人も危ないから外に出ていた方がいいんじゃないですか？ これだけければ魔力は足りてるでしょうし」

おすおすとテイタンが言った。彼女達は魔力が少ないわけではないが、素人だからその方がいい。

「そうだな。お前達はこれに付き合う必要はないだろ」

「いいえ、私はエリネ様のいらっしやる場所に控えております」

エリネ様の後ろに控えていた侍女のカリンが言い、同じく侍女のウイシユニアも頷いて見せる。

「そうか。ではアルシエラの指示に従え」

侍女達は神妙な表情でまた頷く。エノーラお姉様も慣れているのか出ていくつもりはないらしい。

「では協力して下さる皆様は、エディアニース様の後ろ……今から引く線よりも後ろに控えて、心を強く持つて下さい。それだけで大丈夫です。人によっては少し疲れるかもしれませんが、一晩休めれば回復するでしょう」

アルシエラ様の指示を受け、神官がチョークで白い線を描いた。ギル様は私の手を引いて線の後ろまで下がる。侍女達は聖騎士の後ろにいるよう、テイタンが誘導していた。「あの、エリネ様はともかく、魔力が全くないと分かっているニース様は何のため……？」

ニース様は儀式の準備をする神官達に囲まれ、居心地悪そうにしている。その様子を見て私はギル様に尋ねた。

「ニースは魔力がないから、幽霊を集める罠おととして最適なんだ」

悪びれもせず言うギル様。私が呆気にとられていると、ナジカに袖を引かれた。

「なあなあ、あの人って、偉い人なんだろ？」

そう言つてナジカはニース様を指さす。

「王位継承権がある程度には」

「お……いいのか、そんな人を罠とか……」

「本人が納得してみたいだから……」

姫様に言われて、拒否できなかったのだろう。まあ専門家が揃っていて安全だし、さつと大丈夫だ。そうでなければこのようなことはしない。きつと。

「貴族って、もつと偉そうで何もしない奴らだと思ってた」

「そういう人もいるけど、ニース様はエリネ様の聖騎士だから」

私でさえどうかと思っているのだから、実情を知らない彼らにとつては驚愕の扱われ方だろう。

「ニース様は本当に大丈夫なんですか？」

エリネ様も不安なようであるに問う。

「ええ、もしここで失敗したとしても、これほど生気に溢れた方をたかが死霊が取り殺すのは不可能です。何より失敗などいたしませんわ」

アルシエラ様の力強い言葉に、エリネ様は神妙な面持ちで頷いた。

「さあ、グランディナ殿下はこちら側へ」

姫様がニース様から離れると、神官達が円に沿ってエリネ様を囲む。セルも神官の一人としてその輪に加わった。離脱した姫様が白線の後ろまで下がったところで、アルシエラ様が皆を見回す。

「さあ、始めましょう」

アルシエラ様が宣言すると、神官達が聖詞を唱え始めた。

「ナジカ、あれで浄化するの？」

「んなのオレに分かるはずないし」

十四、五くらいの少年がナジカに話しかけていた。私と変わらない年なのに、何故年下のナジカに聞く。

「彼らを哀れみ、救われるように祈ることが除霊だそうよ」

皆の疑問に答えるように姫様が言った。

「それだけでいいの？」

「そう。特にエリネ様は、意図して魔力を広げる訓練を受けているから、儀式の核としては最適で除霊も比較的簡単だそうよ。囿に集まった死霊をエリネ様の魔力で包むのですって。神官達はエリネ様の魔力を広げる手伝いをする者、死霊をおびき寄せ手伝いをする者、生者を守る結果を張る者達と、三つの組に分かれているのよ」

役割だけ聞いても大がかりだ。その上大量の魔力が必要なら、やり手がいないのも当然である。

「ああいう死霊は自分達が救われぬから、生きる者を呪い、妬み、引きずり込もうとするの。その怨念が彼らを縛りつけて救いから遠ざける。だから聖詞を唱えて救いへの道を示してやればいらしいわ。ただし魔力がないと意味ないみたいだけど」

エリネ様は目を伏せて指を組み、ご自分がお仕える豊穣の女神レルカと、それとは別に、冥府の女神ユラにも祈りを捧げる。エリネ様が後からいらっしやったのは、大神殿の中にあるユラの祭壇へ供物と祈りを捧げてきたからだ。成功したら、もう一度供物と感謝を捧げるのだ。

「うっ……」

魔法陣の中にいるニース様が小さく呻いた。すると彼の周囲に、何か靄のようなものが集まっているのが見えた。

「うっわ。すげえ数」

ナジカが声を上げた。私には何か数えられるものがあるようには見えない。

「そんなにすごいなの？」

「あんなにすごいのに見えないの？　なんか中にいるあの人が見えなくなるぐらい霊が集まって、周りをぐるぐる回ってる！　すげえー！」

「私はなんか靄っぽいのが見えるかなあって感じ。ニース様がびくついてるのはよおく見える」

「私には靄どころか遮るものなく、間抜けなニースの姿がよく見えるわ。こういうのは

個人差があるのは知ってたけど、魔力の強さとも関係ないのね」

私以上に見えていない姫様が感心したように言う。その間、ニース様は顔をしかめて周囲を気にしていたが、ついには立っていられなくなったのか膝をついた。すると霧が勢いづいてぶわりと巻き上がる。祈りながらも目を開けたままだったエリネ様は、それを見て慌てて目を伏せ、魔力を広げる。魔力で死霊が弱るというのが本当なら、きつと効果があるのだろう。エリネ様はいつも植物にしているように、魔力で彼らを包む。

突然呻き声うめが聞こえた。辛そうな、悲しそうな呻き。ナジカや他の見える人達が飛び上がった身を寄せたから、彼らにはもっとすごい怨嗟えんさの声こゑが聞こえているのだろう。歌で攻撃できる傀儡術師かいらいじゆつし、自称子守歌のマグリア（音痴）にも見えていたらしく、何も見えていなさそうなクロトという仲間の青年を盾にしている。こういうのは鈍感な方が気が楽でいいのかもしれない。

しばらくすると徐々に呻き声が静まっていく。

「うわっ。本当に少なくなっていく」

ナジカがニース様を見て、声を上げた。

「そうなの？」

「光がキラキラして消えてくよ。浄化されてんのかな？　すげえ」

見えている中で一番余裕があるのは、やはりナジカだった。こういう性格だからか、彼は年少組の中で一番頼られる存在らしい。事実、彼の周りには他の子ども達が引っこしている。そして傀儡術師としては一番強く、かつ見えてないクロトも皆から引っこかれている。

「あの騎士様関係ないのに、騎士様が浄化してるみたいでかっけえ」

それを聞いて、怯えて俯うつむいていた人達も顔を上げる。

「ギル様には見えますか？」

「悪いが、見えんな」

ギル様が首を横に振ると、その隣にいたゼクセンが、やれやれとばかりにため息をつく。「すごく格好いいですよ。聖騎士の制服とも相まって、奇跡のように幻想的な光景です。いかにもルゼちゃんが好きそうな感じなのに、見えなくて残念だね」

ゼクセンは腕を組んでそう言った。言われてみればなんだか損した気分だ。

「除霊つてすげえ派手なんだなあ」

「私にはみんながブツブツ言ってるだけで、すごく地味に見える。ずるい」

「あたいも見えない。ずるい」

「俺は派手に見えるぞ」

見える傀儡術師達も幻想的な光景とやらになって余裕が出てきたのか、雑談を始めた。聖騎士達やエノーラお姉様含め、全体的には地味に見える派が多いから、私が特別鈍感なのではないらしい。

「私にも地味に見えるわ。ニースが藻掻いたりきよろきよろしてるだけで、面白みもないわね」

一番肝心な姫様には、ニース様の格好いい姿は見えないようだ。

衰えてほしいだろうただ一人の人に見てもらえないなんて、可哀想なニース様。

除霊が終わって疲れ切ったニース様を憐れみ、エリネ様が姫様に介抱するよう頼んでいた。私達は空気が読めるので、姫様に呼び止められる前に外で待つ皆を迎えに行った。神官達も念のため建物内を隈なく点検すると言って散り散りになったため、姫様は看護を余儀なくされた。

私達が外に出ると、子守をしていたラントちゃんは女の子達に囲まれ、ママゴトとは違う謎の石を使った遊びに付き合わされていた。エノーラお姉様に付いて来たゼルバ商会の人達もそこにいる。

「ねえねえ王子さま、もう幽霊はいないんですか？」

外で待っていた小さな男の子に聞かれ、ギル様は頷いた。

「ああ。霊の見える神官達が今見回ってくれている。もし残っていたとしてもお前達が怖がるようなのは残っていないし、神官が何日か泊まり込んで様子を見る予定だから安心しろ。なあセル」

名を呼ばれたセルは、不服そうな顔をして見せた。

「僕も泊まり込みなの？」

「お前もエリネ様付きだろう。僕は見えないから役に立てない。お前に任せる」

「後で埋め合わせしてよね」

「聖職者が意地汚いことを。金はないから、金の掛からないことだな」

ギル様はセルの頭をぐしゃぐしゃにかき回しながら言う。

「ギル様、そんなにお金が大変なんですか？」

大きい施設だから、激安とはいってもやっぱり高かったのだろうか。

「個人的な、つまりお前との結婚関係の費用もあるからな」

そういえば高そうな婚約指輪をもらったつげ。結婚に向けて、色々と物入りなのだろう。「孤児院の新設のために国庫からぶんどった予算も余っていないわけじゃないが、無駄使いは出来ない。こいつらは今でも十分、食っていけるだけの技術は持っているから、

大変なのは最初の内だけだろう。きちんと体制を作ってしまったえば、後は大丈夫だ。本来は人材を育てながら運営していく予定だったが、それよりは安く済むはずだ。傀儡術師としてそれなりに完成している大人連中もいるから、新しく子供を引き取っても持て余すことはないだろうし」

予定通り新しく傀儡術師の子を引き取っても、面倒を見てくれそうな大人がたくさんいるということだ。私は隅っこの方に所在なく立っている大人の傀儡術師達を見た。彼らはまだ手を汚していない子供達と違って、組織の一員として働かされていた。そう考えると微妙な立場である。

「女性でしたら、何人かうちで引き取りましようか」

突然、エノーラお姉様がそう提案した。私が有用だから、同じような力を持つ彼らを欲しがるとは思っていたが……

「女の人だけなの？」

「ええ。ほら、女性で警備が出来る人って少ないでしょう？ やっぱり武装しなくても強い女性は護衛として貴重なの。今は私の護衛分を手配するだけで精一杯で、お店にまでは置いておけなくて。夫が私の近くにグモロス以外の男性がいると不安がるから、女性の方がいいのよ」

弟であるゼクセンの問いに、エノーラお姉様は笑顔で答える。

「この前まで暗殺組織にいた人材をいきなり使う気か」

ギル様が呆れたように言う。

「組織に守られていない元組織員と、その辺の傭兵ちやへいではどちらを雇っても同じですわ。言うことを聞く素直で有能な子でしたら、雇ってみたいと思うのは当然ではありませんか？」

「確かにそうだが最初から信用しすぎるのも問題だぞ？ 信用は築いていくものだ」

「もちろんです。いきなりお店に置くのではなく、読み書きを教える他に私達がマナー講座を行うのはいかがでしょう。彼らは世間を知ることが出来て、私達は彼らの人柄を知ることが出来ますわ。世間で通用するマナーが身につけば、ギルネスト殿下も連れ歩きやすくなるのではありませんか」

「そうだな。ついでに買い物物の仕方や一般常識も教えないとな。仕事で外に出ている奴以外は田舎者いなかもの以下なんだ」

「お任せ下さい。どこに出しても恥ずかしくないようにしてみせますわ」

「本人達が望むのなら、引き抜いてもらって構わない。その代わりと言ってはなんだが……」

「机はたくさんあるようですが、ベッドなどは足りていませんね。あとは着る物でしようか」

ギル様の言いいたいことを察して、エノーラお姉さまが必要な物を挙げていく。「頼む。内装の補修は人海戦術でどうにでもなるが、物は新たに用意しないといけないからな」

「ああ、そうそう。先ほどのマナー教室に加えて、レース編みなども教えてはいかがでしょう。器用な子ならちよつと練習すれば」

「そうだな。自分の生活費ぐらいい稼がせるか。ルゼ、教えてやれ。この上なく平和で稼ぎが良くて生産的な術の使い方だろう」

ギル様がこちらを見る。

「え、あのレースって……」

エリネ様達がついに私のレースの作り方を知ってしまうようだ。術を使っているのはバレないようにしてたけど、カリンなんかずつと疑わしそうに見ていたからな。

「ついでに、自分の花嫁衣装のレースも作りなさい。とびっきりの花嫁衣装を作るわよ」

エノーラお姉様の口から出た、花嫁衣装という言葉に動揺し、私は現実から目を逸らすべく空を眺めた。

ああ、青空が綺麗だ。色々と、頑張ろう。

神官達の目で見えて安全だと確認された後、火矢の会の人の案内で、エリネ様や先ほどはつきり見えていた傀儡術師達にも施設内を確認してもらった。

そのついでに備品の確認もした。どの部屋をどう使うかを考えて建物全体の修復しようなどと話し合いながら、ギル様とアルシエラ様が部屋を見て回る。私はその後について行き、必要な備品の数を書き留めていった。雨漏りがする場所があるから、それを最初に直す必要があるらしい。大変だ。

エリネ様は手っ取り早く貢ぎ物を現金に換えて支援できないかと言ったが、あまりこの施設にばかり肩入れしすぎると世間から不平等に見られるので、やめた方がいらしい。傀儡術師はずるいと言われるようになったら、ますます彼らの肩身が狭くなるから。

最初は緊張していた傀儡術師達も、建物内を見て回るうちに浮つき始めた。組織の歴史は浅いらしく、一番年上が四十になるかならないか。一番多いのは十代の少年少女だ。今まで外に出る機会がなかった若い子達が特にそわそわしている。さすがに走り回ったりはしなかったが、それはまだ幽霊がどこかに隠れているんじゃないかと怯えているからだ。それも気にならない好奇心旺盛な子はラントちゃんがつっかり捕まえてくれてい

る。獸族は傀儡術が効きにくいから任せて安心である。

「台所と食堂は掃除するだけで使えそうだな。けっこう皿も調理器具も残ってるぞ」

子供達を引き連れ台所にやってきたラントちゃんが、棚の中を見ながら言う。揺れるお尻が可愛らしく、尻尾を女の子の子に引っ張られて悲鳴を上げたりする様子が大変微笑ましい。

「わあ、広いなっ！　ここ使っていいの？」

ラントちゃんの声を聞いたナジカ達が続いて台所に入り、探検を始めた。他の部屋は荒らされているところもあったのだが、ここは比較的綺麗だった。

「幽霊が出るころの台所はさすがに盗みに入っても無駄だと思われたんだろうね。でも虫とかいると思うから、不用意に触らない方がいいと思うよ。見つけたら全力で駆除だよ！」

私と同じく備品リストを作っていたゼクセンがそう言うと、一部の子供達は素直に警戒した。

続いて部屋を移動して次々確認していく。中には子供を入れるのはどうかという部屋もあったが、そういった部屋は子供達に見せず、ドアに印だけ付けた。

「なあ、明らかに血っぽい汚れが……あったんだけど」

「何言ってるの。そんなの掃除すればいいでしょ」

駄目な部屋の中を見たクロトが小声で冷静に伝えてきたので、私は笑いながら返した。一緒に点検している大人達で、今も怯えているのはレイドとティタンだけだ。皆切り替えが早くて助かる。

一通り確認して一番綺麗だった食堂に戻ってくると、エリネ様は顔見知りの子供達に笑みを向けながら声をかけた。

「皆さん、お掃除しましょうか。お部屋の方はまだ使えないから、どこか寝られる場所を作らないといけません。ここなら簡単なお掃除だけで済みそうですよ」

「そうですね。それがいい」

ギル様がエリネ様の提案に賛成した。食堂なら生活に必要な場所だし、雑魚寝も出来る広さがあるからびったりだ。皆で一緒に寝ていれば、万が一浄化漏れがあったとしても安心だし！

持ち込んだ掃除道具や、台所の隣にあった小部屋から箒やモップなどを取り出し、とりあえず埃を払うことにした。エリネ様付きの巫女達は、子供達に掃除の仕方を教え始める。

「ここで寝るのかあ。あたしのお部屋どこになるのかなあ」

「オバケが出ないといねえラントくん」

「そうだなあ。出ねえ方がいいわなあ」

子供達が暢気に話しながら掃除をする。先ほどゼクセンに言われた通りむやみに棚に手を突っ込まず、傀儡術で中の物をわずかにずらして奥を確かめてから、少しずつ手で物を出していた。その様子を見て、エノーラお姉様が彼らに問う。

「傀儡術で外に出さないの？」

「割れちゃうよー」

「誰も出来ないの？」

「ゼノンー」

女の子が誰かを呼ぶと、皿が一枚一枚浮いて食器棚から出てくる。そしてそのまま床に積み上げられた。見ればさつき台所ではしゃいでいた、私と同年代の男の子が視線を皿に向けて指をすり合わせている。おそらく彼がやっているのだろうが、一枚ずつなのであまり効率はよくない。

「ルゼ」

エノーラお姉様はまどろこしく感じたのか、声をかけてくる。私は渋々力を使い、中の皿を一度に移動させて棚を空にする。続いて割れている物は除けて台の上に綺麗に積

んでみせた。それを見て、子供達が目を丸くする。

「ルゼさん……本当に傀儡術師だったんだ……」

近くにいた聖騎士仲間のマデイさんがぼつりと漏らした。

「器用なことをすると思ってたが、本当に器用だったんだな」

クロトがそう言いながら一抱え分の皿を浮かせたが、皿が崩れかけたのですぐに下ろした。

「クロトでも出来ないの？」

「一塊の物や、そうそう倒れない安定した物を移動させるのは簡単だけど、積んだ皿の列を一度に移動させたら倒すな。不安定な物を安定させながら水平移動させるってのはとにかく難しい。壊してもよければそれなりに出来る奴はいるけどな」

なるほど。思い返してみれば、本を重ねて一度に運ぶのは難しかったような気がする。「ルゼが出来るならって思ったけど、これじゃレース編みも簡単にはいかなさそうね。方法を考えなくちゃ」

エノーラお姉様が呟いた。道は遠そうだが、まあこんなの慣れだしね。

「そういえばルゼ様、いつ王子様と結婚するの？」

私と同じ年頃の少女に問われて、思わず硬直した。まさかそんなことを聞かれるなんて。

「ええ、えっと、その、あの、まだだいたいぶ先だよっ！」
まごつきながら言うと、その様子を見たギル様が笑う。

正式に婚約してから、ギル様はずいぶんと余裕が出来たように見える。前よりも大らかになった。キスされそうになって殴り倒しても、ちっとも怒ってなかったし。

「僕が一番上の兄の婚約者がまだ若くて、ようやく年頃になったばかりなんだ。彼らの結婚式からは間を置きたいから、だいたい先だな。祝いを出す側が大変だろう」

傀儡術師達かいらいじゆしがほうほうと納得して頷いた。祝い事には金銭がかかる。身分が上げれば上がるほど、その額は増えるのだ。祝う方も大変である。

「それまでには、さすがのお前も自覚が出来ているだろう」

ギル様が笑顔で私に言う。

「そ、そうだといいですね」

「そうでなければ困る」

ギル様は私の後頭部に手を回して微笑む。キスでもしそうな態勢だったが、髪の毛の長さを確認するように撫でて、何もせずに離れた。女の子達がつかりしたように肩を落とす。

「なあなあ、王子様」

ナジカがギル様を手招きした。失礼な態度だが、子供がすることなので今は誰も怒ら

ない。

「どうした」

「今さっきの除霊を見てさ、ふと思いついたんだ……ですけど」

「なんだ、言ってみろ」

ナジカは周囲を見回した。

「ここでは言いくいのか？」

「言っていないのかどうか……」

彼が見たのは、エリネ様についてきた巫女みこと神官達だった。

「構わん。子供が言うことで怒る狭量な者はここにはいない」

ナジカは肩をすくめて手近にあった机にもたれた。

「子供の戯れ言たわぶとして聞き流して下さって構いませんが……さっきの除霊を見て思ったんです。すごいなって」

私には理解できなかったが、見えた人達は頷いている。

「信仰心とか忠誠心とか、そういうの、オレはよく分からないけど、なんとなくそういうのが生まれるのは分かりました」

「そう、か……」

私もギル様もその光景が見えなかったこともあり、ナジカがこのように言うのが意外だった。

「で、思い出したんです。死んだレダが、ちよつとルゼ様に似てたんですよ」
私は思わず自分を指さした。

「性格じゃないですよ。ルゼ様がたまに見せる王子様や聖女様への忠誠とか、あと言動とか。聖女様を殺そうと張り切ってたのも、命令っていうか、誰かのためにとって感じで異質だったんです」

ギル様は驚いてナジカを凝視した。

「確かに……言われてみれば」

クロトの言葉に他の者達も頷く。

「確かに、外の奴らは従順なのばつかったなあ」

「やたら強くて、なのに死ねって言われたら死ぬような奴ばつかったね」

「レダも私はお前達とは違つて雰囲気があつたわね」

ギル様が腕を組んで唸る。そんな強い思いをもってエリネ様を殺さなければならぬ理由が、私には思いつかなかつた。本当に邪神信教絡みではないかとすら思える。

「ただ従順な奴つて思つてたけど、今思えばルゼ様みたいに、誰かに忠誠を誓つていた

のかもつて。ただの印象ですけど」

ナジカは私を見て言う。ギル様も私をじつと見て頷いた。

「とても参考になった。ナジカだったか。ルゼも褒めていたが君は賢いな」

ギル様はナジカの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「褒美に菓子でも買つてきてやろう。何か好きな物はあるか？」

ナジカは嬉しそうな顔をしたが、すぐに戸惑つたように振り返つて仲間を見た。私には彼の気持ちがよく理解できたので口を挟む。

「ギル様、この子達は何を頼んでいいのか分からないので、ギル様がお好きな物を買つてくればいいと思います。みんなで分けられる物だったら何でもいいですよ」

何も知らなければ、何を見ても新鮮な驚きになるだろう。

「そうだな。じゃあ子供が好きそうな甘い物を適当に買つてくるか。他の子達も、いい子にしてたら分けてやる」

「ありがとうございますっ」

ナジカのような大人びた少年でも、お菓子と聞けば喜ぶようだ。

「大人達には来週、組織についての聞き取りをするから、考えをまとめておけ。情報が出せなくても叱りはしないから、自己判断でどうでもいいと捨て置いたり、隠したりせ

ず、自分の考えを言ってくれ。使える情報かどうかはこちらで判断する」

ギル様はそれだけ言うて手を叩いた。

「さ、掃除をしよう。これだけ人数がいるんだから、すぐに片付くだろう」

「はい」

「寝具は騎士団から借りてきた物だから、絶対に破くなよ」

「さつきも聞いたもん。やぶかないよ!」

ギル様が忠告すると隣にいた女の子が頬を膨らませる。彼は人から指摘される程度にはしつこい男だ。

掃除をしている間に遅くなってしまい、夕飯は屋台で買ってきた物を食べた。エリネ様と子供達は、こういう屋台料理を食べたのは初めてだそうで、大変楽しんでいた。屋台なんて毎日出てるのは、都をはじめとする大都市ぐらいだろう。

「こういうのは子供の頃以来で、楽しいですね」

エリネ様は子供達と話しながら、お泊まりの準備をしていた。せっかくだから皆で泊まり込んで、何も出ないか見届けようということになったのだ。聖騎士と侍女達は、主であるエリネ様がベッドもない、それも同宿者の半分が男という場所に泊まるなんてと

反対したが、アルシエラ様が、残り半分は女性だし、警備もしっかりしているから問題ないと言って決行されることになった。そもそも聖女は粗末な場所で寝ることもあれば、一般人と雑魚寝ざごねをすることもあるのだという。助けを乞われて出かけた先では何があるか分からない。必要であればこういった場所でも眠ることも出来るよう、聖女には普段から必要以上に贅沢ぜいたくをさせないのだそうだ。田舎いなかの村娘だったエリネ様は元々贅沢とは無縁だったので、聖女として理想的だったのだという。

侍女達には神殿に戻ってもいいと言ったのだが、カリンはともかくウイシユニアまでが残って雑魚寝ざごねすると言い出した。彼女は、エリネ様が攫さらわれた時に付いていなかったことに自責の念を覚えているようだ。アルシエラ様は、エリネ様の侍女として自覚が出てきたと喜んでいた。

「聖女様も小さなところに雑魚寝したの?」

「ええ。村のお祭りの時に」

エリネ様は毛布一枚越しの硬い床の上に座り、暖炉の火を見ながら子供達の質問に答えていた。

「お祭り……」

「都のはそういうのとは少し違いますが、春に大きなお祭りがあります」

エリネ様が言うと言問した子は悲しげに目を伏せた。一番祭りを楽しめる年頃の幼い少女だ。

「どうしました？ お祭りで嫌なことがあったのですか？」

「私がお祭りを見たら神様が怒るって、言われたことがあるような気がするの」

きつと組織に買われる前のことだろう。

「悲しいことを言われたのですね。可哀想に。あなたが見たからと言って、不機嫌になるような神様なんていません。そんなことを言う人がいたら、レルカ様は悲しまれます」

豊穰の女神、慈悲のレルカは、そんな差別はしない。もしそのような神であれば、人々は失望するだろう。

「お祭りは皆で楽しむものです。誰もそれを咎めたりはしません。春のお祭りでは花をばらまくんですよ。それをお守りにするんだそうです。せひ、拾いに来て下さいね」

エリネ様が少女の頬に触れて微笑むと、少女は小さく頷いた。

「楽しくお話ししているところ悪いけど、忠告しておくよ」

椅子に座っていた私は、思うところがあって口を挟んだ。

「人は君達が最初に思っていたほど意地悪ではないけど、君達が今希望を抱いたほど優しくもないよ。自分にとって良い人もいれば、嫌な人もいる。それらの人は、他人にとっ

ては嫌な人、もしくは良い人かもしれない。つまり何が言いたいかというと、今話している人達が親切だからって、他の人達に理解されなかったり、親切にされなかったりした時にキレたら駄目だよ」

ここにいる傀儡術師達は普通の生活は出来ない、暗殺者にもなれる人間達だ。受け入れられるどころか、むしろ嫌われる方が普通だ。理解してもらうには努力が必要なのである。

「だから私達は特殊だってことを忘れず、短気にならないのが世間に馴染むコツだね。多少物を動かせるぐらいの子はともかく、心を読めるような子や、人を操れるような子は特にさ。洗脳しちゃうようなヤバイ力の持ち主はいないみたいだから、そこは安心だけどね」

そういう子がいたら厄介だった。傀儡術師で最も恐れられるのは、そういう力の持ち主なのだ。

「現実には厳しいよ。権力者の庇護下にあると生きるのは楽だけど、それでやっかむ人もいるだろうしね。そのあたりも含めてギル様が面倒を見て下さるから、何かされたら自分で仕返しなんてせずに報告するように。仕返しの時に法律に触れたら庇ってやれないからね」

優しくしてやりたいが、それはエリネ様にお任せする。彼らの立場をよく理解している私が厳しくしないと。他の人では加減が分からないだろうから。

「特にクロト、あんたみたいな直情的なタイプが一番心配だよ」

名指しされたクロトは鼻白む。彼は未だに、仲間を殺したことのある私に対して反感を露わにしている。彼は仲間のために怒り、身体を張って仲間を守るような男だ。仲間が大切なのは当然だが、彼の態度を見てみると生きにくそうだと感じてしまう。

「普通に生きるのは、思ったよりも難しいことなのですね」

エリネ様が呟いた。

思えばここにいる全員が、普通の人生を歩んでいない。騎士達も、神官達も、巫女達も。ひよっとしたら、普通と括られるような人間など、いないのかもしれない。

ふとそんな事を考えた時だ。

「聖女様聖女様」

ナジカに呼ばれ、皆はそちらを見た。

「どうしたの？」

「寝る前にすっげえ悪いんだけどさあ……」

彼は台所の方を指さした。何やらポタポタと音が聞こえる。彼が示したカウンターの

上には……逆さになってこちらを覗く顔があった。三つも。

いや、もう一つ出た。もう一つ……また一つ……

「私にも見える!？」

私は皆と一緒にあんぐりと口を開いて、増殖する顔を凝視した。

つつ……と口元から水が垂れ、長い髪を伝ってカウンターに落ちる。

「……し、神官の皆さん、お願いしますっ」

「かしこまりました」

どうやらここは外からも寄せ付けやすい場所で、今のは別の場所から来たものらしかった。

結局ここが幽霊の出ない場所になるまで一週間以上かかるのだが、そんなことはまだ誰も想像すらしていなかった。

やることは山のようにあるのだ。傀儡術師は火矢の会の連中に任せているが、傀儡術師達の元アシトの現場検証の結果や、黒幕について調べているネイド達からの報告に目を通さなければならぬ。

「エリネ様を狙った黒幕をどうにかすれば、もっと気楽になるんだがな……」

ただでさえ聖女付きの紫杯はすることが多いのだ。聖騎士達を管理し、神殿と各方面との調整をしなければならぬ。エリネ様が外出する時は特に気を使う。

先日エリネ様とルゼが誘拐された植物園の視察は、敵に当たりを付けられやすかったにしても失態だった。幸いにも無事に救出し、ルゼが敵を取り込んできたから挽回できたが、こんなことは二度とないようにしなければならぬ。そのためにも調査資料を分析し、エリネ様を狙った奴らを割り出さなければならぬのに、その上傀儡術師達まで引き取ったので忙しい。

分析は幹部組織である紫杯の仕事ではないが、任せられる相手がいらないのだから仕方がない。その代わりエリネ様の警護については、同じ紫杯の上の連中に頼った方がいいだろう。頼られれば悪い気はしないはずだし、任せてしまえば僕への文句も少なくなる。エリネ様に外に行くなどとは言えないし、聖女関係のことは対処が難しいのだ。

「でもルゼちゃんと同じ職場で良かったですね。仕事に理解がない子だと、私と仕事と

どっちが大事なのって、定番のあの台詞が出てきますよ、きつと」

「そんな女ならそもそも結婚しようなどとは思わん。僕が暇でも、むしろあの女の方が僕を放つとくだらうな」

「そりやそうですよ。ルゼちゃんけっこう面倒くさがり屋さんだから」

ゼクセンは菓子にかじりつき、くすくすと笑う。見慣れぬ菓子だったので僕が興味を示すと、彼は容器を差し出した。それを受け取ろうとした時、ドアがノックもなしに開かれた。

誰かと思えば、ルゼだった。

彼女は何か泣いていた。泣いて、途方に暮れたように立ち尽くしている。

「ど、どうしっ」

持っていたカップを置いて駆け寄ると、ルゼは泣きながら縋りついてきた。

「ギル様っ」

「どうした!? 何かあったのか!」

エリネ様のことならこのように弱々しい泣き方はしないだろう。だから原因はエリネ様ではない。では何故泣くのか。僕には想像もつかなかった。

「教えて下さい、ギル様。どうしたら好きな人を諦めることが出来ますかっ!」



「僕が知るかっ！」

選りに選って、好きな人を諦める方法だ。

好きな人。目の前が真っ白になる。

いつか逃げ出すのではと不安に思っではいたが、それは身分的なことや、嫁いびり的なことがあるからだ。さすがに他に好きな男が出来たからなどという理由は想定外である。

「婚約早々、別れ話かっ!？」

「え、婚約？」

「僕とお前は婚約してるんだっ！」

「それは知ってますけど……………ああ」

ルゼは僕から身体を離して手を打った。

「言い方を間違えました。正確には『好きな人を諦めさせる方法』です」

諦める方法ではなく諦めさせる方法。

「……………紛らわしい！」

思わず脳天に手刀しとうを入れていた。もし彼女が男なら、我を忘れて拳こぶしで殴り、気を失うまで蹴りを入れていたところだ。

「そんなに怒らなくなつて……。仮にも婚約者に、好きな人が出来たんですなんて言う馬鹿がいますか。もう、心配症なんだから」

「もう、じゃない。心配させるお前が悪いだろうがっ」

僕はルゼの両肩を掴んで凄んだ。

「そんなことよりも、大変なんです。諦めさせないっ」

「誰の話だ？」

「ウイシュニアです」

あまり目立たないエリネ様の侍女の姿を思い浮かべる。今まで手を掛けさせるようなことは一切なかった。真面目で男にもまったく興味を示さず、それが逆に親の悩みの種になっているくらいだ。彼女の母親は、愛娘まなむすめには出来れば政略結婚ではなく恋愛結婚してほしいと願っているらしく、さらには聖騎士達をその相手として望んでいるらしい。セルが彼女の弟から姉の様子を聞かれて、困つたと言っていた。

「とりあえず座れ」

あの気位の高いウイシュニアが、どこかの馬の骨に惚ほれてしまったのか聞き出さなければならぬ。

ルゼは腰を下ろすと、珍しく菓子に手を伸ばした。

「気付いたきっかけは午前中、ウイシュニアが鼻歌を歌いながら、楽しそうに騎士達に飲み物を出しに行つたからです」

彼女はいつも淡々と仕事をこなすタイプだから、確かにそれはおかしい。

「いつもはカボチャでも見るような目をして騎士達に接していたのに、その時はやはりそれは嬉しそうで、私と一緒に見ていたカリンが言うには、恋する乙女おんなのようだって……」

カボチャ……こいつはあの目をそういう風に見てたのか……

「で、可能性がある相手をエリネ様と一緒に考えてみたんです。まず最近出会つた若い男と言えは神官です。あまりいい男はいなかったけど、ひよつとしたら私が気付かなかつただけで、素敵な方が交じつたのかもありません。後は——植物園で傀儡術師達かいらいじゆしに襲われた時、聖騎士と何かあつたとか……」

聖騎士の誰に惚れるんだ？ いい男は売約済みだし……

あの時ウイシュニアは、敵の足止め組と一緒にいた。ティタンとレイドもそこにいたはずだが、残念ながらここにいるレイドは気を失っていたから聞くだけ無駄だろう。後はニースがいたはずだが性格的におそらく対象外だし、他に誰がいただろうか。マディセルだったらルゼは喜んで応援するだろうし、美人で馬好きでルゼのファンである恋人を持つタロスか？

「その時部屋の外で警備していた聖騎士達が話を聞いていたらしく、『馬鹿な、そんなはずっ』とか『分かってる、有り得ない！でもっ！』って言っていたんです。だから何を知っているのか聞いてみたんです」

するとルゼの目に涙が浮かんだ。僕とゼクセンは思わず顔を見合わせる。

ウイシュニアの想い人に恋人がいる程度のことでもこんな表情はしないだろう。

「そしたらスルヤが……ハワーズがウイシュニアを守ってたなあって……」

僕は小さく頷いた。ハワーズと言えば、元青盾せいしゆんの、女の子が大好きで最も聖騎士らしからぬ、大変残念でどうしようもない男である。

「有り得んだろ。ないない、それだけはない。彼女からカボチャどころかゴキブリを見ような目を向けられている連中の筆頭だぞ？」

実は実力だけなら聖騎士団でも上位なのだが、それを台無しにする性格をしている。ちよっといいところを見せただけで、ウイシュニアの気が変わるとは思えない。

「でも、みんなで見たんです。彼女がつっけんどんにハワーズにお茶を渡していたのを。それも心なしか照れくさそうに。いつもならつっけんどんとすら言えないほど無感情に仕事をするのに！」

ルゼは涙目でテーパールを殴りながら訴えた。

「有り得なくないですか？有り得ないでしょう、あのハワーズですよ。いい加減で、カワイイ女の子なら誰でもよくて、常に揉め事の中心になっている！」

とうとうルゼは身を乗り出して、僕の胸ぐらを掴み揺さぶってきた。涙目でこうされると僕が悪いことをしたように見えるので、勘弁してほしい。そう思いながら彼女の頭を撫なでる。

「分かった、分かったから泣きながら人を揺さぶるな」

ウイシュニアとは親しくもないはずだが、相手がああハワーズのため、混乱しているようだ。

しかし何故ハワーズはこれほどまでルゼに嫌がられるんだ。僕もあいつを鞭むちで打つことはあるが、根はいい奴だと知っている。

「落ち着け。何も泣くことはないだろう」

「だ、だって……ウイシュニアみたいな美人が、あんな男に振り回されたら可哀想で可哀想で」

「家位的かいてきにも身分的ぶんぱんにも、ウイシュニアに相応ふさびしくないわけじゃない。もし両思いならお前まへがとやかく言うことでもないだろう」

ハワーズは三位のデユサ。つまりルゼと同じ家位だ。聖女を守る『花冠かかんの騎士団』の

聖騎士という名誉ある職に就いている実力者。ウイシュニアの両親も喜ぶだろう。

「尻の軽さに嫌気がさしてすぐ離婚になったら、エリネ様の名に傷が付きませう」

「……………まあ、有り得そうだな」

ウイシュニアは気位の高い女だ。だからこそ誰にも言わず胸に秘めているのだろう。

相手が相手だから、反対されたり趣味を疑われたりすると恐れているのかもしれない。

「しかし彼女がちょっと守られたぐらいで男に惚れるとは…………」

「今まで守られるような経験がなかったんじゃないですか？ ドキドキするような危険

な場面だと、恋に落ちやすいつて聞きますよ。で、破局もしやすいらしいじゃないですか」

ルゼの言うことももつともだ。安易な恋は容易に破局する。それが職場内であれば士

気に関わる。

悩んでいると、ゼクセンが菓子を手片手に言う。

「今まで悪い面ばかり見てた上で好きになったのなら、諦めさせるのって難しい気がするなあ」

ハワーズの日頃の姿を思い出す。僕と同じぐらいの歳だったと思うが、まるで新人のようなどころがある。もちろん悪い意味でだ。

「確かに日頃のあれを知りつつ惚れたなら、一番確実な『幻滅させる』という手が使え

ないな」

厄介だ。僕としてはハワーズが結婚してくれるなら、それはそれでいいと考えている。

結婚すればあいつも落ち着くかもしれない。だがその展開を泣くほど嫌がる婚約者を見れば、彼らよりも自分の結婚が危うくなる。

「ギル様、どうにかして下さい。仲を壊すのとか得意そうじゃないですか」

「言っておくが、ニースとグラがああなってるのは僕のせいじゃないぞ。不運の積み重ねだ。僕が何かしたわけじゃあない」

ルゼはため息をついた。

「ああ、私はいったいどうしたら……………このままではエリネ様に合わず顔がありません」

「エリネ様も反対しているのか？」

「当然です。カリンと巫女達と一部の聖騎士達もです」

「一部の聖騎士は、ただのやつかみだろう」

あのハワーズがウイシュニアのような美少女に惚れられたとなれば、当然足を引っ張ろうとする者もいるだろう。相手がいい男ならともかく、ハワーズだ。あいつになら勝てると思っていた奴は間違いない足を引っ張る。何としても幻滅させてやらなければと考えるはずだ。

「それにしても、エリネ様もか……」

恋する乙女を目を覚まさせるのは大変難しい。聖騎士達に任せても無駄だろう。

「そうだ。どうせなら傀儡術師達に相談してみるのはどうだ？ 何か使える能力を持っている奴がいるかも知れないぞ。僕はまだ大ざっぱにしか聞いていないから知らないが」

ルゼはしばし考え、頷いた。決意に満ちた瞳は魅力的だが、理由が実にくだらない。「そうですね、ギル様。私、頑張ります。頑張ってウィシユニアを正常な状態に戻して見せます。ありがとうございました。それでは失礼します」

そう言ってルゼは去って行った。恋の病とは言うが、彼女は完全に病気の一種と考えているようだ。まあ相手が相手だから気持ちには分からなくもない。

「……………いいんですか、あれ」

今まで沈黙を守ってきたレイドに問われ、僕は首を横に振った。とりあえず勧めてはみたが、他の誰かならともかく、あの女を一人で暴走させていいはずがない。

「追ってくる」

気が進まなかったが、ルゼを追った。彼女はエリネ様さえ関わらなければ無茶はしない。しかしエリネ様の期待に応えるためなら、なんだってする。一体どんな騒動が起ることか！

せっかく手に入れた能力者達を、ルゼで染めてはならない。ルゼのように過激になってもらったら困るのだ。

一緒にやって来た傀儡術師收容施設（仮）で、ルゼは精神に干渉する能力を持つ者を数人集めて向き合っていた。

その中にはナジカもおり、頬杖を突きつつあまりにもくだらない頼みごとに呆れている。

「そういうのってさあ、余計なお世話って奴だろ？ そこの一般庶民に惚れたっていうならヤバイかもしれねーけど、聖騎士はみんな貴族なんだろ？」

彼は学習能力の高い子供で、ルゼと違って偏りのない記憶力を持っている。顔も名前も覚え、読み書きも一番よく出来るのだ。おまけに人なつこく、教師をしている火矢の会の連中からの覚えもいい。将来は子供達を中心になってくれると思われる、ルゼに近い万能型の能力者だ。とはいえルゼのように相手と視界を共有することは出来ない。その代わり、少しだけ精神干渉能力がある。

本人が言うには、人から少し好かれ、相手を説得しやすくする能力らしい。つまりは人を騙しやすくする能力だ。口が上手そうだから、将来は恐ろしい男になるだろう。顔

立ちも悪くはないし、詐欺師にならないよう気を付けておかなければならない。

「他の誰かならいいけど、あいつだけは嫌なの」

「個人的な好みかよ。いいのかよ、そんな理由で人の恋心を壊して」

「一時の気の迷いだからいいの」

ナジカはため息をついた。ルゼの言い分がおかしいのは間違いない。だがこれはこの件を知っている者の総意である。

「あのなあ、人の心を本人に気付かれずに操るのは難しいんだよ」

「一人ぐらい出来るのはいないの？」

「俺らの力だけで嫌いな物を好きにさせるのは無理だし、好きな物を嫌いにさせるのも無理だ」

皆が頷く。ルゼは腕を組んで顔をしかめた。

「なんつーかさあ、心は難しいんだよ。よくやった訓練は、野生動物に対して、木の实とか普段食べている物を大好物みたいに錯覚させるとか、好物から気を逸らすとかそういうのだったし」

「意外に無害な訓練してたんだね」

「当たり前だろ。俺達を何だと思ってるんだよ」

確かにルゼよりはまっとうな気がする。こいつは魔物に外道なことを平気でしてたらしいしな。

「そんな動物でも干渉を解くと、状況が理解できなくてきよとんとするんだ。何も知らない相手ならそれでも十分だろうけどな。だけど俺達の力を知ってる人間に、干渉がばれないはずがないよ」

説得力のある言葉に、ルゼがだんだん洪面じやうめんになっていく。

「例えば、好きな相手をもっと好きにさせたりは出来るけどさ、好きでもない相手を作るにさせるのは無理。そんなこと出来たらここにいないし」

この場には大人もいるのだが、話しているのはナジカだ。彼以外は他人とあまり話したことがないのだろう。傀儡術師かいらいじゆしはその能力を恐れられて孤立してしまいがちなのだ。相手の心をもとにか出来るなら、このように人見知りになることも、売られたり捨てられたりすることもなかったはずだ。人の心以前に人見知りを改善し、社交性を身につけさせなければならぬ連中である。

「じゃあ、嫌いなものをもっと嫌いにするのは？」

ルゼが聞くと、ナジカは難しい顔で後ろに立つ大人達をちらりと見て、それから子供にも視線を向ける。